

# 下峰原遺跡

諫早西部団地開発事業に伴う発掘調査報告書

1998. 3

諫早市埋蔵文化財調査協議会

## 序 文

長崎県の県央に位置する諫早市は、古より交通の要衝として栄え、多くの貴重な遺跡が残されています。

江戸時代には長崎と小倉を結ぶ長崎街道が主要な脇街道として整備され、多くの文物が去来し、最先端の情報を運ぶ道として機能しました。

また、古く律令時代に整備された西海道の肥前の道も、下峰原遺跡の近傍に立地していたと思われます。

今回の調査は、長崎県住宅供給公社の委託を受けて実施したもので、これら街道の布設された時期より遙かに遡る時代の遺構などが確認されましたが、これら遺構群もまさに他の地域との交流によって成立したものであり、数千年の古来よりの息吹を感じることができます。この報告書は、それら遺構群を精緻に解説し、遺構群から類推できる当時の生活復元を試みています。

本書が、文化財保護、生涯学習の一助としてご活用頂ければ幸甚に存じます。

本書を刊行するにあたり、試掘調査・本調査を通じ、諸種ご協力を頂きました長崎県住宅供給公社をはじめ、関係機関に深甚の謝意を表する次第であります。

平成10年3月31日

諫早市埋蔵文化財調査協議会

会長 立 山 司

## 例 言

1. 本書は、諫早西部団地開発事業に伴う諫早市破籠井町所在下峰原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 範囲確認調査及び本調査は、長崎県住宅供給公社の委託を受けて、諫早市埋蔵文化財調査協議会が実施した。  
範囲確認調査は、同協議会の川瀬雄一、古賀力、本調査は、同協議会の秀島貞康、古賀力、橋本幸男が担当した。
3. 発掘調査の期間は、  
範囲確認調査が、1997（平成8）年4月15日～同年4月26日  
本調査が、1997（平成8）年7月29日～同年10月24日である。
4. 調査に伴う地形測量、実測、写真撮影等は範囲確認調査、本調査ともにそれぞれ担当者が行なった。
5. 出土遺物等の整理作業は、諫早市郷土館において、秀島貞康、川瀬雄一、古賀力、橋本幸男が行なった。
6. 本書に記載した標高は、海拔高度であり、また、方位は磁北を示している。
7. 出土遺物、調査関係図書類は、諫早市郷土館で保管している。
8. 本書の執筆は、IIを古賀が、他は秀島が執筆した。
9. 本書の編集は、秀島が担当した。

# 本文目次

## 序 文 例 言

I	調査に至る経緯と調査組織	1
II	遺跡の地理的・歴史的環境と周辺の遺跡	3
III	調査の記録	6
1	範囲確認調査と本調査	6
2	A地点とC地点の土層の状況	10
3	検出された遺構と遺物	11
3-1	検出された遺構	11
	ピット群	11
	埋 壙	17
	長方形土壇	18
	ドーナツ状土壇	18
3-2	検出された遺物	20
	石 器	20
	土 器	27
IV	ま と め	30

## 報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図	諫早市の位置	3
第2図	周辺遺跡分布図	4
第3図	風観岳支石墓群平成9年度検出主体部実測図 (S-1/50)	5
第4図	遺跡周辺地形図及び調査地点 (S-1/3000)	7
第5図	A地点地形図とグリッド配置図 (S-1/400)	8
第6図	C地点地形図とグリッド配置図 (S-1/400)	9
第7図	土層断面図 (S-1/30)	10
第8図	A・B-0・00区ピット群平面図 (S-1/40)	13~14
第9図	A・B-0・00区ピット群断面図 (S-1/30)	15
第10図	ピット29遺物出土状況 (S-1/5)	16
第11図	A地点1号埋甕実測図 (S-1/20)	17
第12図	A地点2号埋甕実測図 (S-1/20)	18
第13図	C地点長方形土壌実測図 (S-1/50)	19
第14図	C地点ドーナツ状土壌実測図 (S-1/30)	19
第15図	石器実測図 (S-2/3)	23
第16図	石器実測図 (S-2/3)	24
第17図	石器実測図 (S-2/3)	25
第18図	石器実測図 (S-2/3)	28
第19図	土器実測図 (S-1/2)	29

## 表 目 次

第1表	発掘調査工程表	2
第2表	ピット観察表	12
第3表	出土遺物器種別(左)、石材別(右)一覧	21
第4表	実測遺物一覧表	22
第5表	縄文時代埋甕一覧	33~34

## 図 版 目 次

図版1	遺跡遠景～pit29遺物出土状況
図版2	1号埋甕検出状況～長方形土壌
図版3	出土遺物・石器(表・裏)
図版4	出土遺物・石器(表・裏)
図版5	出土遺物・石器(表・裏)
図版6	出土遺物・土器・陶器

## I 調査に至る経緯と調査組織

諫早市の西部、大村市との市境にある破籠井町、真崎町を中心とした諫早西部開発が企図され、その中で長崎県住宅供給公社が主体となる「諫早西部団地」が計画された。

計画は約79%に及ぶ広大なものであったが、遺跡は計画範囲内にはただ1か所であった。

すなわち、本遺跡は、九州横断自動車道建設（現長崎自動車道）に伴う「大村湾東岸地区埋蔵文化財分布調査」の際に発見された。その後、諫早北バイパス（現国道34号線）建設工事予定地に該当するため、建設省九州地方建設局から委託を受けて、昭和49年9月～昭和50年8月まで長崎県教育委員会において発掘調査を実施することとなった。

下って平成8年、前述「諫早西部団地」が計画されるに伴い、諫早市教育委員会と長崎県住宅供給公社間で本「下峰原遺跡」の取り扱いについて随時協議を行い、前回調査がバイパス建設予定地に限定したものであり、今計画が前回調査範囲から外れているため、工事に先立つ発掘調査が必要であるとの確認がなされ、今次の調査となったものである。

調査は、諫早市教育委員会内に諫早市埋蔵文化財調査協議会を設置し、長崎県住宅供給公社から委託を受けて実施することとなった。

まず、遺跡の範囲確認調査を平成8年4月15日～26日まで実施した。遺跡は3地点に所在し、それぞれA、B、C地点と呼称した。この中でB地点が、古く耕作に伴う天地返しを受けており包含層の存在が認められなかった。よって、範囲確認調査はA、B地点で延べ40m<sup>2</sup>実施することとなった。

この調査の結果に基づいて、平成8年7月から開発に伴う本調査を実施することとなった。なお、範囲確認調査及び本調査を実施した諫早市埋蔵文化財調査協議会の調査体制は以下のとおりである。

### [範囲確認調査]

会 長	立山 司	(諫早市教育長)
副 会 長	田中 司郎	( // 教育次長)
事務局 長	廣田陽一郎	( // 文化学習課長)
事務局次長	浦川 謙司	( // 課長補佐)
事務局 員	川本 正博	( // 主任)
	// 川瀬 雄一	( // 事務職員 調査担当)
	// 古賀 力	( // 嘱託員 // )

[本調査]

会 長 立山 司 (諫早市教育委員会教育長)  
 副 会 長 田中 司郎 ( // 教育次長)  
 事 務 局 長 國井 政武 ( // 文化学習課長)  
 事 務 局 次 長 浦川 謙司 ( // 課長補佐)  
 事 務 局 員 川本 正博 ( // 主任)  
 // 秀島 貞康 ( // 主任 調査担当)  
 // 古賀 力 ( // 囑託員 // )  
 // 橋本 幸男 ( // 調査指導員 // )

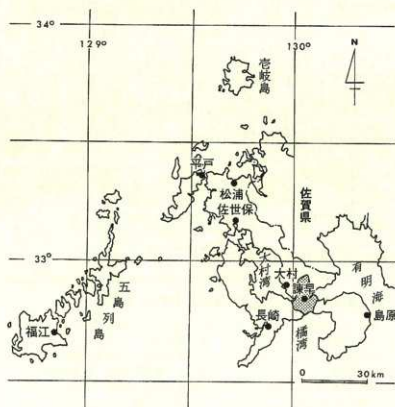
第1表 発掘調査工程表

地点	トレンチ		7 月	8 月	9 月	10 月
	行	列				
A	A・B	0-00				
	A	0				
		1				
		2				
	B	0				
		1				
		2				
	C	0				
		1				
		2				
	D	0				
		1				
	E	0				
		1				
		2				
	F	0				
		1				
	G	0				
	H	0				
		1				
I	1					
J	8					
K	7					
L	6					
	除草・測量					
C	D	3				
		4				
	E	1				
		2				
		4				
	G	1				
		2				
		3				
	H	2				
		3				
	4					
	除草・測量					

## II 遺跡の地理的・歴史的環境と周辺の遺跡

諫早市破籠井町は市の北西部に位置して西側は大村市と境界を接し、北側は諫早市大渡野町と、東側は柴田町、南側は真崎町とそれぞれ接している。遺跡の立地は第三紀末に噴出した玄武岩によって形成された風観岳（標高236.2M）との裾部に位置していて、基盤である第三紀堆積岩層を火山活動による噴出物が覆って台地状をなし、標高は高いところで57メートルを数える。そして台地の東側は多良山地に源を発して流れる本明川に向かって傾斜し、国道34号とJR九州大村線が平行して通る辺りで本明川の開析による段丘崖状を呈している。一方南西側は大村湾に向かって谷筋が走り、台地は緩やかに傾斜して湾奥の諫早市津水付近の海岸に至っている。調査地点南東側に湧水地点があり、灌漑用の溜池が造られているが周囲の開発に伴い利用されなくなっている。しかしながらこれらの立地条件は本遺跡の主体をなすと思われる縄文時代晩期の初期水稲耕作を含む生活立地をうかがわせ、また旧石器時代以降近世までの各種遺跡の立地条件を充足する好適の場所である。

本遺跡の周辺には隣接の大村市域を含めて遺跡地図に示したように、後期旧石器時代以降近代に至るまでの遺跡が点在していて本遺跡を除く主なものを挙げると、旧石器時代では諫早・大村両市の境界を流れ、大村湾に注ぐ真崎川流域に多いが真崎西遺跡でナイフ形石器が採取されている以外詳細は不明である。しかしながら大村湾最奥部沿岸には諫早市中核工業団地用地



第1図 諫早市の位置

造成工事及び九州横断自動車道建設工事に伴う調査で報告された西輪久道遺跡・鷹野遺跡などがあり対比できよう。

縄文時代及び弥生時代については縄文時代前期の遺物を出土した浜田遺跡は大村湾汀線付近に立地する同期の遺跡として、最近明らかになりつつある有明海岸の縄文時代前期から晩期に至る低地遺跡と共に注目される遺跡である。さらに縄文時代晩期から弥生時代におよぶ支石墓を主体とした風観岳支石墓群がある。





第2図 周辺遺跡分布図 (国土地理院発行 1/25,000地形図「諫早」を使用)

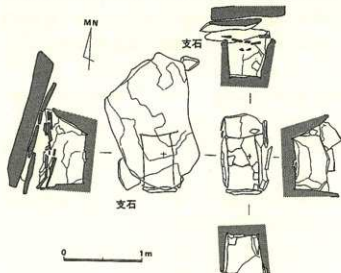
- |                     |                  |                     |
|---------------------|------------------|---------------------|
| 1 下峰原遺跡 (旧石器・縄文)    | 10 永昌遺跡 (縄文)     | 19 鳳眼岳支石墓群 (縄文・弥生)  |
| 2 上峰原遺跡 (旧石器・縄文・近世) | 11 上横址遺跡         | 20 鹿越遺跡 (旧石器・縄文)    |
| 3 平松城跡 (中世)         | 12 折山頭遺跡         | 21 善福寺遺跡 (旧石器・縄文)   |
| 4 平松城跡根小屋跡 (中世)     | 13 金谷遺跡          | 22 多々良川B遺跡 (旧石器・縄文) |
| 5 開城推定地 (中世)        | 14 真崎城跡 (中世)     | 23 多々良川A遺跡 (縄文)     |
| 6 本明B遺跡 (古墳)        | 15 真崎西遺跡 (旧石器)   | 24 蓮蔵寺遺跡 (旧石器・縄文)   |
| 7 本明石棺群 (市指定) (古墳)  | 16 西佐竹遺跡 (縄文)    | 25 迫ノ山遺跡 (旧石器・弥生)   |
| 8 八天下遺跡 (旧石器・弥生)    | 17 貝津横島B遺跡 (縄文)  | 26 伊賀峠城跡 (中世)       |
| 9 上打越遺跡 (旧石器)       | 18 浜田遺跡 (旧石器・縄文) | 27 清隆遺跡 (旧石器・縄文)    |

古墳時代では多良山地の山麓を形成する火山性台地の先端部に古墳時代初頭の墓地在り、その代表は昭和15年ごろからその所在を知られていた市指定史跡本明石棺群である。また同時期の石棺墓は大村湾最奥部沿岸の貝津横島B遺跡にもみられるものである。

古代には推定であるが、西海道が付近を通っていたとされ、行政区界は現代でも古代もそのぎ郡とたかき郡の境界とほぼ同じであり、中世には国境として真崎城・開城・平松城・伊賀峰城等が築かれている。開城跡は大村氏の記録の中で文明6年(1446)有馬貴純の大村攻めの記述として有馬氏に加担した伊佐早城主西郷尚善が、有馬勢の先鋒として支城尾和谷城を経て大村に攻め入ったとあり、これが開城(尾和谷城)に関する初見である。未調査のため遺構など不明の点が多いが現地の小字名に土井の内・土井の下・油土井など城跡に関係すると思われるものがあり、緑泥片岩製五輪塔・六地藏石幢(星巖・享禄壬辰の刻銘)などが出土し、付近に根小屋の存在も推定される。真崎城跡も西郷氏の支城と伝えられ真崎川を挟んで対岸には大村氏の支城伊賀峰城があり大村湾の最奥真崎川河口の津水の港を巡る戦略拠点に設けられた城である。また本明川を隔てた対岸にある平松城跡は小規模ながら各種遺構がよく残されていて、平成3年に行った根小屋推定地の試掘調査で、13世紀後半ごろの中国製青磁などが出土している。

これらの遺跡の中で注目されるのは縄文時代晩期のものとされる風観岳支石墓群で、本遺跡に隣接して通る近世長崎街道を北西に約1.5km進んだ風観岳の鞍部(標高220M)に位置していて、平成9年度から3年計画で確認調査を実施しており、初年度の調査によって新しい支石墓一基をほぼ完全な状態で検出し、はじめて詳細な調査を実施することができた。今後の調査の展開次第では本遺跡と関連して、墓地と生活・生産跡との関係などが予想されるところである。

本下峰原遺跡は昭和43年ごろにナイフ形石器を始め各種の土器片が採集されて知られるようになり、九州横断自動車道建設に伴う遺跡分布調査によって確認され、昭和49年9月より国道34号線諫早バイパス建設工事に伴って、工事部分にかかる遺跡の一部を長崎県教育委員会が調査を実施している。



第3図 風観岳支石墓群平成9年度検出  
主体部実測図(S-1/50)

### III 調査の記録

#### 1. 範囲確認調査と本調査

範囲確認調査は、 $2 \times 2$  mの試掘溝をA地点6箇所、B地点2箇所、C地点4箇所の計12箇所、約50m<sup>2</sup>を設定し、調査を実施した。

A地点での土層は基本的に4層に分層可能で、火砕泥流堆積物であるⅣ層、黄褐色粘質土のⅢ層、茶褐色粘質土のⅡ層、耕作土のⅠ層である。

B地点の土層は、後世の攪乱が激しく、遺物の包含層自体が存在しなかった。

C地点では、5層に分層可能であった。Ⅴ層の火砕泥流堆積物は各試掘溝の基盤層として存在し、その上に黄褐色から茶褐色の層が堆積している。また、4 Tにおいてはドーナツ状遺構が確認され一部土層の逆転現象も生じていた。

さて、範囲確認調査時の土層堆積状況は先年の調査（昭和49年9月から昭和50年8月までの調査で、昭和50年に報告書・図録編既報。以下「既報」と記述。）と比較してみると、かなりの相違点と合致点が見られるようである。すなわち、既報A地点は丘陵稜線の東側に立地し、等高線の間隔が広い、すなわち緩傾斜面をなすのにたいし、今次のA地点は西側への傾斜角が急で、既報との土層堆積の違いを見せている。

すなわち、既報ではA地点では第Ⅱ層とされる茶褐色粘質土層から縄文時代晩期を主とする土器片が多数包含され、また第Ⅲ層黒褐色粘質土層からはナイフ形石器、刺片などが出土したと報じている。しかし、今次のA地点では第Ⅲ層が認められず、第Ⅱ層の下は既報第Ⅴ層の黄褐色粘質土層となっており、遺物包含層の確認はなされなかった。この既報の状況は東側に緩斜面をもつC地点に近い土層の状態である。

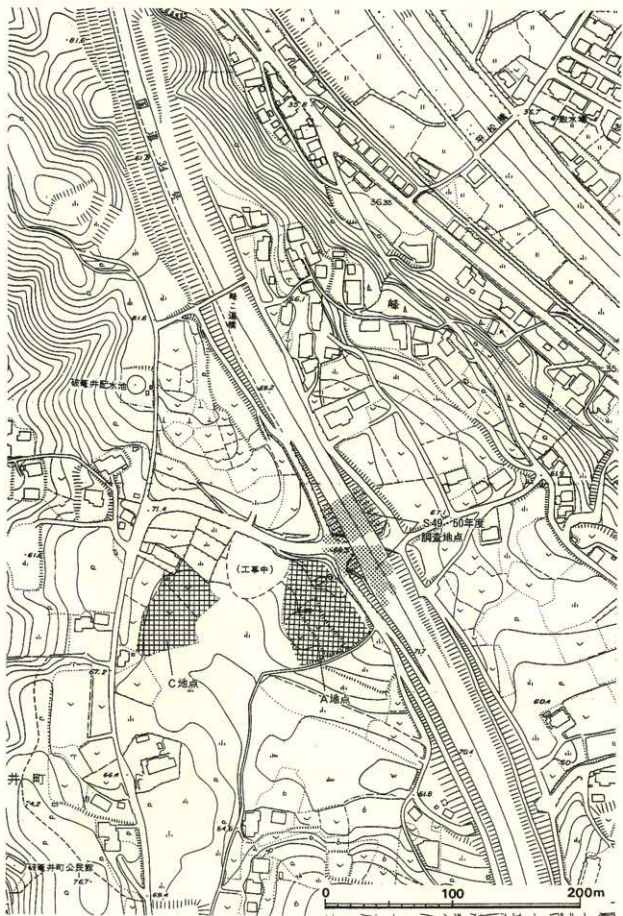
また、既報では56～58区に遺物が集中しており、とくにD58区は良好な保存状態にあるだろうと推察されたにもかかわらず、用地が未買収であり後刻の調査が予定されていたものの実施されなかったのは残念であった。それは、今次の調査で確認した遺構が未調査区に接していたからである。

さて、本調査のA地点は、国道34号線の西側丘陵上に立地し、標高で72m前後を測る。国道敷設以前は、より東側に丘陵の稜線が存在し、南側に大きく張り出す地形を示していた。A地点はこの丘陵の西側に標高を減減する途中に存在し、さらに下位に下ると小さな沼や水田に接するようになる。

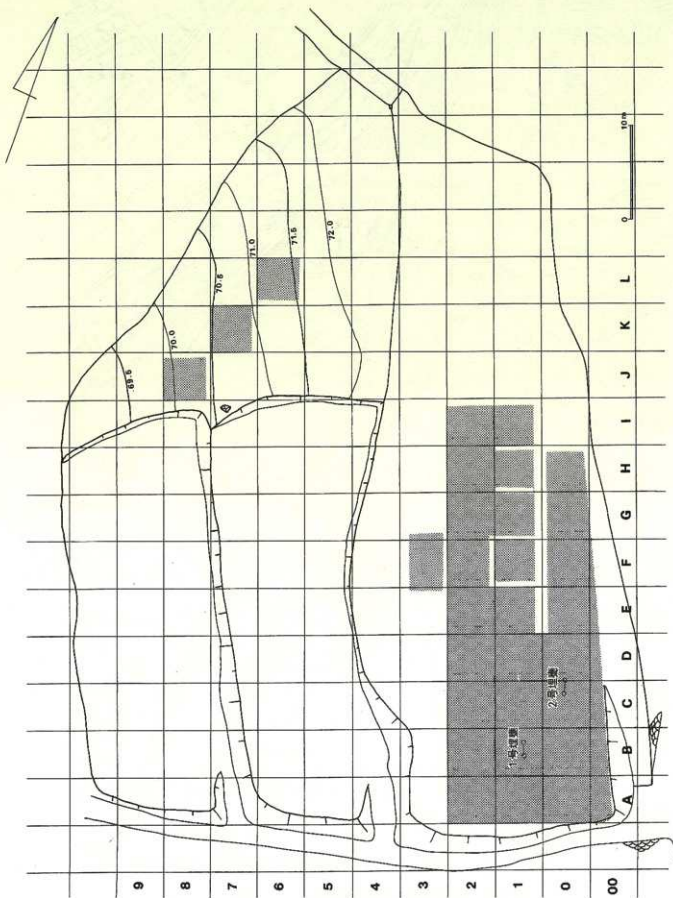
遺跡の範囲として予想されたのは、南北80m×東西60m程度であった。しかし、A地点の西南城は畑地造成のため削平されており、包含層の存在は認められなかった。

A地点では、等高線にほぼ沿うように $5 \times 5$  mの調査区を設定し、南から北にA、B、C、東から西に1、2、3とし、調査区はA-1、A-2・・・と呼称するようにした。

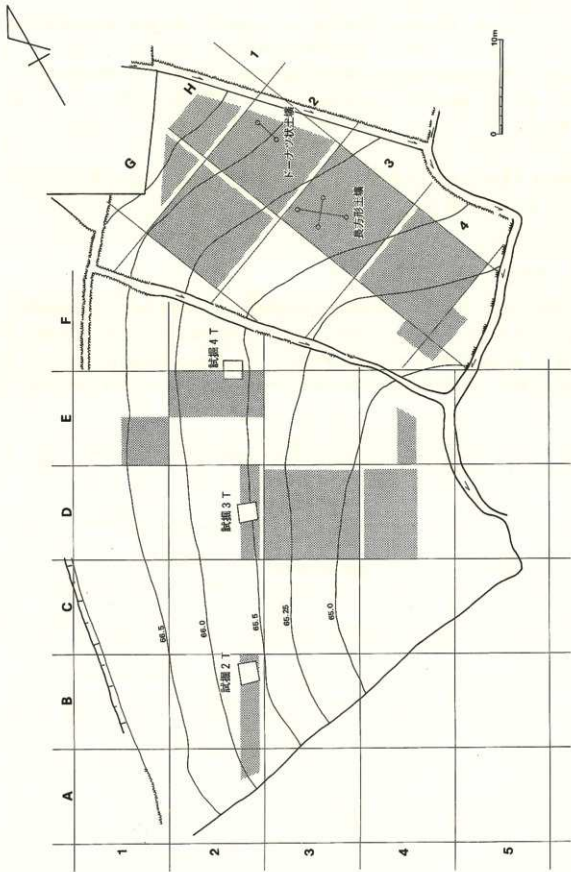
調査は、各調査区の二方に土層観察用の畦を残し、上位から下位にかけ実施することとし、



第4図 遺跡周辺地形図及び調査地点 (1/3000)



第5図 A地点地形図とグリッド配置図 (S-1/400) (アミ部分は調査範囲)



第6図 C地点地形図とグリッド配置図 (S-1/400) (ア//部分は調査範囲)

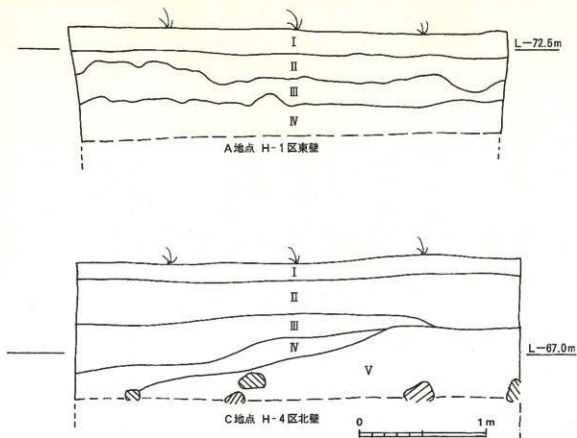
遺構等が確認された場合は面的に広げるようにした。

また、C地点では、標高68m前後を最高位として、A地点、つまり東側に標高を逐減するような地形を示している。C地点でもA地点同様、等高線に沿うように調査区を設定し、10×10mのメッシュをきり、南から北にA、B、C、西から東に1、2、3とし、調査区はA-1、A-2と呼称した。調査の方法は、調査範囲も広く、かつ遺構の存在が予想されたため、調査区の設定に即して、2m幅のトレンチを設定し、遺構検出の場合は面的に広げて実施することとした。

遺物の取り上げは、出土地点を1/10にドット化し、標高をそれぞれ付与して取り上げることにした。また、遺構の図化は平面図、立面図ともに1/10の縮尺で行なった。

## 2. A地点とC地点の土層の状況

第7図の上段は、A地点のH-1区東壁の土層実測図である。基盤層としたIV層は明黄褐色の粘土層で粒度は細かく、わずかに小児人頭大の安山岩歪円礫を含んでいる。無遺物層。10YR6/8。III層は淡黒褐色で、II層より砂質に富む。下面はIV層との漸移層的になっている。粒度は極めて細かい。5YR3/2。II層は茶褐色粘質土で、乾燥するとI層と同様タテにクワックが



第7図 土層断面図 (1/30)

走る。カーボン粒を含む。2.5YR4/4。I層は現表土で、暗茶褐色砂質土で5mm大の細砂、焼土等を含む。5YR3/1。なお遺物はIII層以下では検出されなかった。

下段は、C地点H-4区北壁の実測図である。基盤層としたV層は、カラシ色をした安山岩風化層と思われ、手に着くと黄色く染まるほどである。一抱え大の安山岩亜角礫を含んでおり、中には割られた痕跡を示すものも見られ、この深さまで人為が及んだことを示している。IV層は漸移層。III層は黒褐色のバサバサした層で、部分的に黒色を呈する。腐植土様である。II層は茶褐色粘質土で、乾燥するとタテにクラックが走る。I層は現表土で、灰黒色砂質土。

### 3. 検出された遺構と遺物

A地点では、A・B-0・00において多数の整形・不整形なピット群が確認され、また周辺から2基の埋甕が検出された。

C地点では、東側に緩斜面を見せる地形を示し、また溜め池、旧水田に直面しており生活遺構の検出が十分に想定されたのであるが、長期にわたる耕作・深耕のためかプライマリーな包含層や生活遺構の確認はなされなかった。遺構としては、炭窯と思われる被熱部分や焼土を残す長方形土壇とドーナツ状土壇の遺構が確認された。

遺物は第3表のとおりで、A地点出土分を掲載した。C地点は攪乱が深くまで及んでいたため、ドットでは取り上げていない。全体で1588点を取り上げ、内訳は石器1241点、土器347点である。土器・石器全体を含めた分布状況は、A～B-00～1において全体の45%が出土し、このうちの26%がピット群から検出されている。出土石器の特徴は、器種としては71%がチップ、11%が剝片であり、全体の組成としては貧弱である。

また、既報記載の旧石器時代の遺物は殆ど見られなかったのも人為の影響であろうと思われる。

#### 3-1 検出された遺構

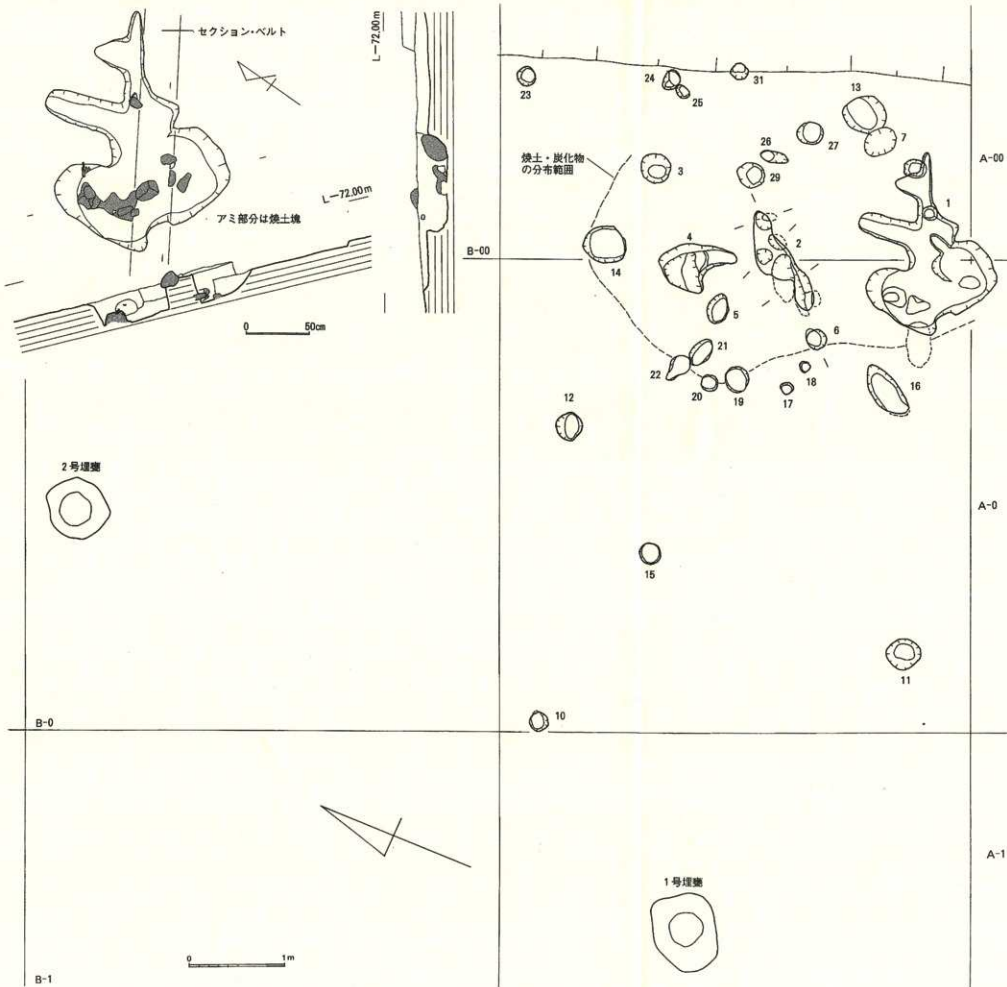
##### ピット群 (第8～10図)

A地点で確認されたピット群は第2表のとおりである。28基が検出された。形状・寸法等は第2表を参照されたいが、平面的には柱穴状をなすものと、不整形なものに分けることができる。柱穴状をなすものには、その断面から見て11、13、14、19、21、26、27、29はその蓋然性が高い。13、14、29はセット関係を示しているようで棟持ち柱用とも考えられ大きくしっかっている。1、2、4は不整形な土壇とも称すべきもので平面形や断面に斉一性が認められない。1、2などは底面が平坦でなく、また壁面からさらにピットを穿っており、これにより結果的に平面形がイビツになったものと思われる。1は連結の土壇かとも見えるが西側に延びたピットは途中で途切れてしまっている。底面には焼土が貼りついた状態で検出された。また覆土にも焼土塊・片が土器片、石器片、カーボン塊などと一緒の確認された。2も不整形な土壇

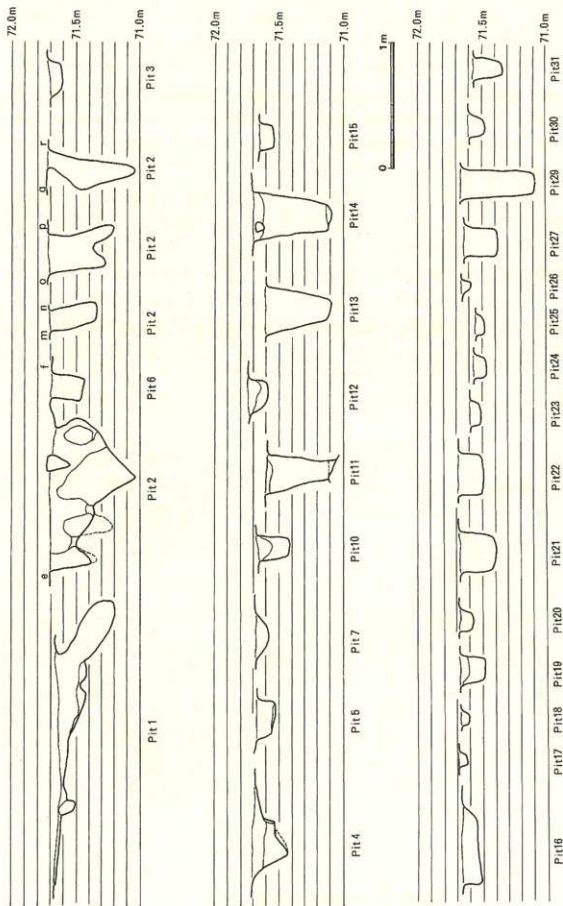


第2表 ビット観察一覧

番号	形状	上面長・短径 (cm) 底面 $\mu$	現存深 (cm)	覆土	出土遺物	備考
1	不整形で底面近くの埋から更に穴を掘っている。底面は不整	190×140	20	赤く焼けた粘土塊を含む焼土混じりの茶褐色土	土器5、石器27、焼土塊10 土器は赤褐色、焼土塊良好、焼成良好で晩期であろうか	土器焼成時に混入して使ったものの残滓か？結晶片岩の砕片 3cm大あり
2	高筒円形の不整形で、底面近くから更に6穴を掘っている	120×40	20~70	赤く焼けた粘土塊を含む焼土混じりの茶褐色土一部、土器製作用の焼土塊あり	土器5、石器6、焼土塊・片 時期の特定は小片のため難	石器はチップなどが主で素材とはならないもの
3	略円形	30×34	10	赤色粒子、炭片を含む茶褐色土	石器7点	No101、3点
4	略三角形	85×55	25	赤色粒子、炭片を含む茶褐色土	土器4点、石器8点、焼土塊11点	
5	楕円形	30×20	15	赤色粒子、炭片を含む茶褐色土		
6	円形	20	25	赤色粒子、炭片を含む茶褐色土	石器1点、結晶片岩片で素材不可 土器1点 焼土塊・脂肪膜付着？黒変あり	
7	楕円形	37×28	10 浅い形状	赤色粒子、炭片を含む茶褐色土	黒曜石チップ2個	柱状穴の Pit ではなく、P-13上面で消滅している
10	円形	20	22	上層 茶褐色土でカーボンを含む 下層 上層より黄茶色つよく、カーボン含まず	ob, An の fl, RM (風化クサリ粒)	
11	円形 底面にかけてつぼまる掘り方	35 15	25	上層 淡黒褐色土でカーボン、焼土小片含む 下層 上層より薄い色調	ob の fl, ペイナ古い	
12	円形	30	15	上層 茶褐色土でカーボンを含む 下層 上層より黄茶色つよく、カーボン含まず	ob の fl, chip で素材不可 1点の fl 接点	
13	円形 底面にかけてつぼまる掘り方	43 15	50	淡黒褐色土でカーボン、焼土小片含む	石器21点、土器3点、炭化種子？5点 石器の中には、焼土混入？の結晶片岩3点あり 炭化種子には大豆？のようなもの有り	No14とセットか？ ob・uf 3点実測 土器は赤褐色の薄いもので、黒変などを含み、焼成良好、器面調整はハケでない ⇒晩期？
14	略円形	40×45 32×35	60	上層 淡黒褐色土でカーボン、焼土小片含む 下層 上層より薄い色調	石器8点、土器2点 中1点は No13分と似通う 結晶片岩小片2点	ob・uf 1点実測
15	円形	20	10	茶褐色土で黄茶色つよく、カーボン含まず	結晶片岩5mm大の砕片1点	
16	楕円形	30×60	10~15	茶褐色土	砂岩2、ob-chip1	
17	円形	12	7	黄茶褐色土でカーボン・焼土片含む		
18	円形	10	6	黄茶褐色土でカーボン・焼土片含む	ob-chip1	
19	円形	25	20	上層 淡黒褐色土でカーボン、焼土小片含む 下層 上層より薄い色調	ob-chip1	
20	円形	18	10	茶褐色土でカーボン・焼土片含む	ob-RM, chip 各1	
21	楕円形	20×32	26	茶褐色土でカーボン・焼土片含む	土器1点 No13分と似通う	
22	楕円形	22×32	18	茶褐色土でカーボン・焼土片含む	ob-chip2	素材不可
23	円形	20 13	8	茶褐色土でカーボン・焼土片含む		
24	楕円形	22×17	10	茶褐色土		
25	楕円形	17×12	8	茶褐色土		
26	楕円形	30×13	8	茶褐色土でカーボン・焼土片含む		
27	略円形	27×24	27	茶褐色土でカーボン・焼土片含む	ob-chip1	
29	略円形	28×26 21×17	57	上位はやや暗黒色を帯び、下位になるに従って茶色味(粘性)を増す傾向にある一時的にたまったものと思われる	石器35点、土器12点 (砂岩原石3点) (花崗岩原石7点)	花崗岩は接合関係あり AB0-19+AB0-20+4+13+17+32(重量750g) 垂直距離70cmで花崗岩の接合があり、一時的に埋没していることを示唆 砂岩も接合関係あり 1+7 垂直距離50cmで砂岩の接合があり、一時的に埋没していることを示唆
30	略円形	23×20 18×13	13	黄茶褐色土でカーボン・焼土片含む	石器4点	石器は砕片で素材不可
31	円形(上面は平穴)	17×? 13×8	22	茶褐色土	黒曜石 Flake 3点	直接の接合はないが、近接の資料実測因あり



第8図 A・B-O・O区ピット群平面図  
(S-1/40)

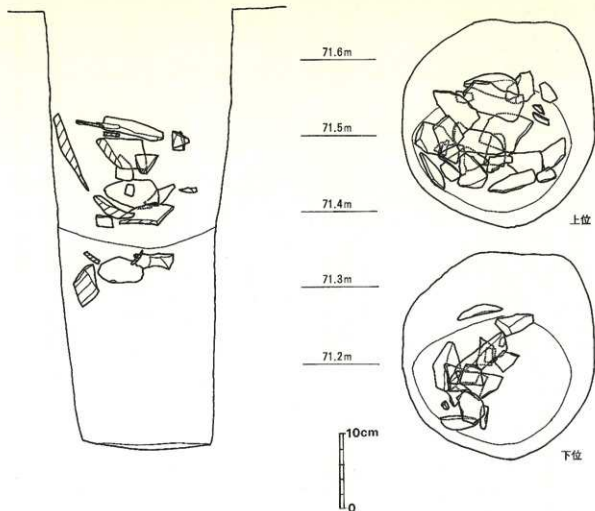


第9図 A・B-O・O区ビット群断面図 (S-1/30)

で深さも20~70cmと一定しておらず、壁面あるいは墳底近くから6穴を穿っている。第10図はピット29の遺物出土状況である。土器12点、石器35点がほぼ中位より出土し、垂直距離50~70cmで接合を見せるものがあり短期間に埋没したことを窺わせている。土器は碎片であったが、接合の結果、浅鉢に復元ができた。石器は、およそ素材とは思われない輝石安山岩や砂岩等とともに、粘土に混入するのかわ花崗岩の打割礫（完形には復元できなかったがAB0・19+AB0・20+4+13+17+32が接合し重量750gを計る。）が見られた。この土壇の時期は出土した土器（第19図4）により縄文時代晩期前半の所産と思われる。

さて、集中して検出されたピットの概要は以上であるが、特筆すべきは28基中22基に遺物が見られたことで、78.6%にあたっている。各ピットからの出土遺物は第2表に掲げるが、土器は小片で図化できないが相似た相を見せ、また石器も素材として存在するものは、ピット31出土遺物（東側の崖面で確認され半欠の状態で検出されたが、中から接合関係に近いフレーク3枚があり、柱穴とはその形状等からも思われない。第16図37、38、41）をのぞけば殆どない。

遺物のなかで、土器の素材として結晶片岩を挙げるができる。約20数片検出され、うちピットから半数の12片がある。出土したピットは、1、6、13、14、15からほぼ全体に分布



第10図 ピット29遺物出土状況（S-1/5）

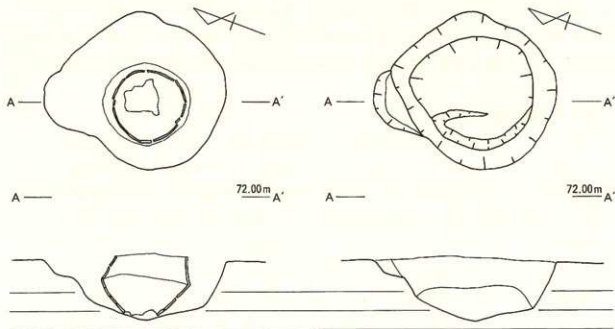
している。このことから、28基のピット群は一時期に成立・利用された可能性が大きい。これらのピット群を包括する遺構の構造は不明であるが、結晶片岩、焼土片、花崗岩などがA・B-0・00の広範囲に及んでいることや、ピット出土遺物との接合関係にあるものが存在することは、後世の攪乱がかなり深いところまで及んでいたことを窺わせている。このことが、遺構の周壁の立ち上がりや、周溝等をも消滅させたものと考えられた。

### 埋甕 (第11・12図)

2基確認され、B-1区検出のものを1号、C-0区検出のものを2号とした。

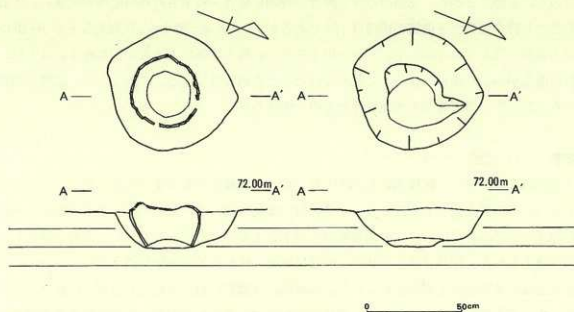
1号は、ほぼ表土直下で確認され、一部後世の攪乱は認められたものの、掘り方約90×80cm現存の深さ約35cmの略円形で、断面逆梯形を呈する土壌に、底部を打ち欠いた深鉢を埋設した状態で検出された。深鉢は直立の状態に掘底に据え、掘り方との間隙は締めりのあるカーボン粒子を含む暗茶褐色土で充填されていた。深鉢底部は故意に打ち欠いているが、口縁は後世の攪乱によって欠失したものであろう。深鉢の中も土で充填されており、上位は暗茶褐色粘質土、下位は茶褐色粘質土であった。深鉢は日用品を転用しており、内面に炭化物の付着が認められた。また、深鉢内外からの副葬品等遺物の検出はなかった。

2号は、1号から北位に約8m離れた位置で確認された。掘り方、深鉢の埋設の方法は1号とほぼ同様であるが、一回り小さい。棺に転用した深鉢は胴下半部を打ち欠いて直立の状態に埋置し、掘り方との間隙を掘り上げた土で充填している。深鉢は頸部上位を欠損している。遺物は、掘り方との間から黒曜石剥片と棺内から安山岩円礫、黒曜石製石鏃(第15図7)各1点が検出された。この2基の埋甕の保存状態は、周縁の土壌が粘性の強いものであったためか非常に脆く、バインダーを塗布して取り上げたにもかかわらず、復元が困難を極めた。



第11図 A地点1号埋甕実測図(S-1/20)

0 90cm



第12図 A地点2号埋壺実測図(S-1/20)

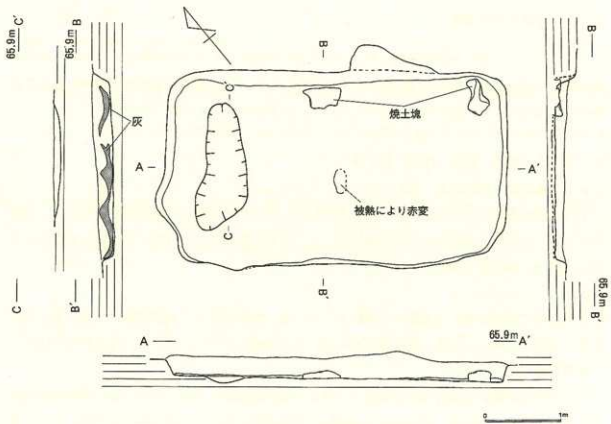
#### 長方形土壺(第13図)

C地点H-3区において検出した。平面形は隅丸の長方形で、法量は床面で長軸440cm、短軸230cm、深さ15~40cmを測る。緩傾斜面に位置するものの床面はほぼ水平に作られている。周壁は急角度で立ち上がり、床面との接面には何の造作も見られない。床面・周壁ともに被熱はあまり見受けられない。しかし、床面の北側に焼土塊や中央部に被熱により赤変部分が認められるため火を利用する施設といえる。覆土は黄褐色土を基本に炭化した木や繊維質の材が混在し、焼土・灰が全体に波打った様に堆積している。また、壁際には竹であろうか炭化した繊維の束が認められた。床面の西側には長軸170cm、短軸70cm、深さ10cmの浅く皿状に落ち込んだ部分が見られた。覆土は暗灰色と褐色粘質土である。遺物は多量の炭のほか、縄文土器、黒曜石石核等とともに陶器の花瓶(第19図10)が見られ近世以後の所産の炭窯であることが知られた。

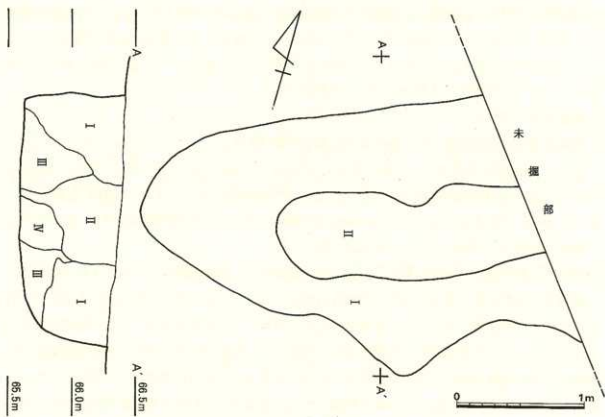
#### ドーナツ状土壺(第14図)

C地点H-2区から検出された。東側は石垣及び溝に接近していたため調査を実施しなかった。おおよそ2/3程を検出したものと思われる。長軸300cm、短軸210cm程の長楕円形で、深さが約80cm程度で、断面U字形である。検出時は茶褐色土に周辺が黒色で中心が黄褐色のドーナツ状であった。Ⅳ層は黄色土で安山岩の風化による土層で第7図下段のⅤと同一層である。Ⅲ層は褐色土で、粒子は細かく締まっている。Ⅱ層は黄褐色土でⅣ層であったものが再堆積したものと思われる。Ⅰ層は黒色土で第7図下段のⅢ層と同じである。

遺物はⅠ、Ⅱ、Ⅲ層からそれぞれ7点、3点、5点出土した。主なものは、石錐、細石刃、ナイフ形石器など旧石器に属するものが認められたが、原位置での出土でないのが惜しまれる。



第13図 C地点長方形土坑実測図 (S-1/50)



第14図 C地点ドーナツ状土坑実測図 (S-1/30)

### 3-2 検出された遺物

ドットマップで取り上げた資料は第3表のとおりであり、そのうち石器とされるものや使用痕が認められるもの、あるいは石器として典型的なもので、本遺跡の諸属性を検討する上で必要なものはできるだけ取り上げ、図化している。土器についても同様である。

#### 3-2-1 石器 (第15~19図、第3表)

##### ナイフ形石器 (第15図1、2)

1は良質の黒曜石の小さな縦長の剥片を素材に、左・右縁基部に急傾斜細調整を施す。打面及びバルブは除去。刃部を全体に破損している。2も小形のもので刃部が1と左右逆であるが、同形・同巧。質の悪い黒曜石を素材としパティナは古い。

##### 細石刃 (第15図3、4)

3は良質で透明度のある黒曜石を素材としている。25mmほどで、尾部のみ折り取っている。3条の剥離面を残し、左縁に使用痕を認める。4は10mmと小さい。狭小な打面と打痕を残す。

##### 台形石器 (第15図5、6)

5は良質の黒曜石の横広剥片を素材に、バルブを完全に除去して、90度に近い急傾斜細調整を左側縁に施す。その後、左側縁から正面に平坦細調整を行なう。右側縁は左側縁に比して弧状になるように斜めの細調整を行い、全体バチ状を呈している。細調整はそれぞれ背面から正面にむかって行なう。刃部には正面からの営為により刃こぼれを生じている。また、基部を除いて被熱している。6は透明感のある良質の黒曜石を素材に、5と同巧の技術で調整しているが、右側縁が正面から背面にかけての急傾斜細調整である点異なっている。刃部に刃こぼれが見られ、その痕跡は5とは異なって平坦剥離状である。

##### 石鏃 (第15図7~19)

素材は17の安山岩を除いて、他はすべて黒曜石製である。

基部の形態から分類すると、深く挟り込むもの(7~10、12)、浅く挟り込むもの(11、13~15、18)、平基式に近いもの(16、17、19)に分類可能である。また、側縁が鋸歯状(7、9、18)の例、局部磨製(12)のものがある。細調整によりすべて主要剥離面の残存は見られない。

##### 掻器・削器 (第15図20~22、第16図23~26)

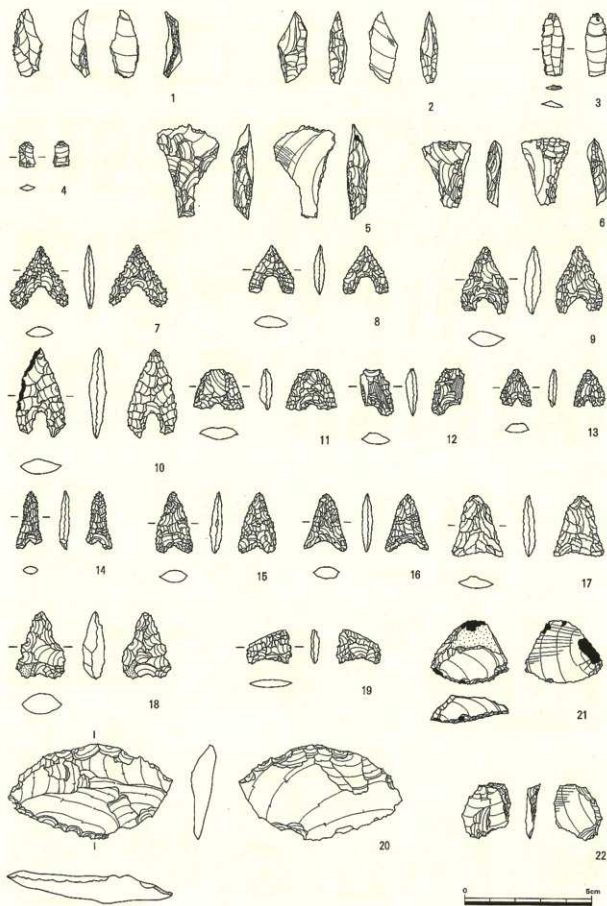
20は木の葉形をした安山岩製で、正面下縁は背面からの斜め細調整により、上縁は両面よりの細調整で刃部を作り出す。刃部の形状は石匙状である。21は分厚い黒曜石剥片を使用し、背面より斜めの細調整を施す。22は良質の黒曜石を使用し、右縁に正面からの斜め細調整で刃部を作り出す。23は不透明で灰色の黒曜石の大形剥片で、自然面を多く残す。主要剥離面の左右両側縁に平坦剥離を施して刃部を作り出す。24~26はともに良質の黒曜石を素材とし、24は下縁に、25は折り取った上縁に、26は左側縁にともに背面からの微細な斜め細調整を施して刃部を作っている。





第4表 実測遺物一覧表

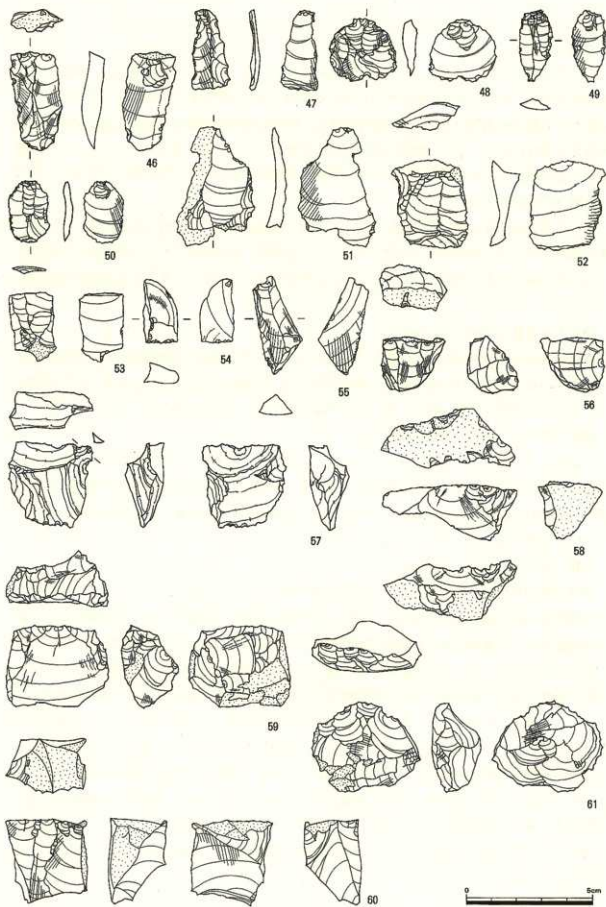
種別番号	遺物番号	器 種	石 材	地 点	出上区	出土列	取上番号	備 考
第15回	1	ナイフ形石器	黒曜石	表採				
第15回	2	ナイフ形石器	黒曜石	C	C	2	ドーナツ	III層
第15回	3	鋸石刃	黒曜石	C	C	2	ドーナツ	III層
第15回	4	鋸石刃	黒曜石	A	C	2	8	
第15回	5	台形石鏃	黒曜石	C	H	2	ドーナツ	III層
第15回	6	石包丁鏃	黒曜石	表採				
第15回	7	石鏃	黒曜石	A	C	0	2号埋塚内	
第15回	8	石鏃	黒曜石	表採				
第15回	9	石鏃	黒曜石・灰色	A	B	0	105	
第15回	10	石鏃	黒曜石	表採				
第15回	11	石鏃	黒曜石	A	C	0	109	
第15回	12	石鏃	黒曜石	A	G	0	1	
第15回	13	石鏃	黒曜石	A	F	0	34	
第15回	14	石鏃	黒曜石	A	F	0	62	
第15回	15	石鏃	黒曜石・灰色	A	C	0	47	
第15回	16	石鏃	黒曜石・灰色	A	B	0	194	
第15回	17	石鏃	安山岩	A	D	0	66	
第15回	18	石鏃	黒曜石	A	F	0	50	
第15回	19	石鏃	黒曜石	A	C	0	97	
第15回	20	燧石	安山岩	A	A・B	0・00	24	
第15回	21	燧石	黒曜石	A	B	0	34	
第15回	22	燧石	黒曜石	A	A・B	0・00	ビット29	19
第16回	23	燧石	黒曜石	A	A・B	0・00	ビット13	
第16回	24	燧石	黒曜石	A	A・B	0・00	ビット13	
第16回	25	燧石	黒曜石	A	C	0	130	
第16回	26	燧石	黒曜石	A	A・B	0・00	ビット13	
第16回	27	石鏃	黒曜石	A	B	1	41	
第16回	28	石鏃	黒曜石	A	G	0	2	
第16回	29	石鏃	黒曜石	A	I	1	27	
第16回	30	石鏃	黒曜石	C	H	2	ドーナツ	I層
第16回	31	石鏃	黒曜石	A	C	0	73	
第16回	32	燧石	黒曜石	A	C	2	22	
第16回	33	燧石	黒曜石	A	B	0	74	
第16回	34	燧石	黒曜石	A	G	0	83	
第16回	35	挟り入り石鏃	黒曜石	A	B	0	1	
第16回	36	挟り入り石鏃	黒曜石・灰色	A	C	0	96	
第16回	37	剥片	黒曜石	A	A・B	0・00	ビット31	
第16回	38	剥片	黒曜石	A	A・B	0・00	ビット31	
第16回	39	剥片	黒曜石	A	A・B	0・00	ビット13	
第16回	40	使用前のある剥片	黒曜石	A	C	0	201	
第16回	41	剥片	黒曜石	A	A・B	0・00	ビット31	
第16回	42	使用前のある剥片	黒曜石	A	C	2	34	
第16回	43	剥片	黒曜石	A	A	0	16	
第16回	44	使用前のある剥片	黒曜石	A	B	1	23	
第16回	45	使用前のある剥片	黒曜石	A	G	0	41	
第17回	46	使用前のある剥片	黒曜石	表採				
第17回	47	使用前のある剥片	黒曜石	A	B	0	58	
第17回	48	使用前のある剥片	黒曜石	A	B	1	18	
第17回	49	使用前のある剥片	黒曜石	C	C	2	ドーナツ	III層
第17回	50	使用前のある剥片	黒曜石	A	B	0	23	
第17回	51	使用前のある剥片	黒曜石	A	C	0	32	
第17回	52	使用前のある剥片	黒曜石・灰色	A	C	2	30	
第17回	53	使用前のある剥片	黒曜石・白色	A	C	2	9	
第17回	54	使用前のある剥片	黒曜石	A	A・B	0・00	16	
第17回	55	使用前のある剥片	黒曜石	A	A・B	0・00	ビット14	
第17回	56	石鏃	黒曜石	表採				
第17回	57	石鏃	黒曜石・灰色	A	B	2	6	石鏃
第17回	58	石鏃	黒曜石	A	F	0	61	
第17回	59	石鏃	黒曜石	A	D	0	61	
第17回	60	石鏃	黒曜石	A	F	0	57	
第17回	61	石鏃	黒曜石	A	A・B	0・00	ビット29	18
第18回	62	石鏃	黒曜石	A	A・B	0・00	ビット29	29
第18回	63	石鏃	黒曜石	表採				
第18回	64	石鏃	黒曜石	表採				
第18回	65	石鏃	黒曜石	A	C	0	138	
第18回	66	磨製石斧	砂岩	A	A・B	0	14	
第18回	67	石包丁形石鏃	砂岩	表採				
種別番号	遺物番号	器 種	地 点	出上区	出土列	取上番号	備 考	
第19回	1	浮鉢		B	1		1号埋塚	
第19回	2	浮鉢		C	0		2号埋塚	
第19回	3	浮鉢		B	1			
第19回	4	浅鉢		A・B	0・00	ビット29	4+5+6	
第19回	5	浅鉢		A	T	1	III層	
第19回	6	浅鉢		A	M	5	64	
第19回	7	浅鉢		A	D	6	41	
第19回	8	深鉢		C	H	3		
第19回	9	深鉢		C	E	2		
第19回	10	陶器		C	H	3	長方形土甕	



第15图 石器实测图



第16图 石器实测图



第17图 石器实测图

### 石錐 (第16図27~31)

27~29ともに相似た形状を示す黒曜石を素材にしている。断面は三角形を示し、微細な使用痕が見られる。30は上下に打面をもつ石核から剥取された黒曜石剥片を素材に、左側縁下部に正面から急傾斜細調整によって錐部を作り出す。微細な使用痕が看取される。31は縦長の黒曜石剥片を素材にしている。右側縁下端に自然面を外すような加撃が看取されるが、またこの部位がこの加撃によって三角形を示し、かつ微細な使用痕も見られるため石錐としておく。

### 彫器 (第16図32~34)

すべて良質の黒曜石製で34は横広の剥片を素材に端部からねじれ気味の加撃によって一条の彫刀面を作出。33は剥片を縦に半割するように一条の彫刀面を作出。34は自然打面から剥取された分厚い横広剥片を素材としており、上下にそれぞれ一条のしっかりした彫刀面を作り出している。

### 挟り入り石器 (第16図35、36)

35は良質の黒曜石横広剥片を使用し、左縁は正面から折り取り平坦な細調整を、上縁は弧状に挟りをいれ急傾斜の細調整を施す。素材の使い方、細調整の方法など台形石器などと共通している。36は灰色の黒曜石剥片を使用し、下端を折り取って弧状に細調整している。

### 剥片 (第16図37~45、第17図46~55)

不定形のものが多いなか、46、47、49などは縦長剥片で、とくに49などは定形的な石核から剥取されたものであろう。52は灰色で風化度の高い黒曜石、53は白色不透明の黒曜石のほかは黒色の黒曜石を素材にしている。37、38はピット31からのもので近接しているが接合しない。この中で使用痕は、37~39、41以外に認められる。

### 石核 (第17図58~61、第18図62~65)

56は良質の黒曜石を使用しており、打面を90度転位させながら剥取している。57は灰色を呈する風化度の高い黒曜石で、90度ずつ転位させながら剥取した残核で、右上端は背面からの斜め細調整によって断面三角形の錐状に細調整している。58は不純物を含む黒曜石で、自然面を打面として大きく2回上下より剥取している。59も不純物を含む黒曜石を素材とし、90度ずつ打面を転位しながら剥取している。60は漆黒色の良質の黒曜石を素材に90度ずつ打面を転位している。自然面を打面としている。61は背面を自然営力によって剥取されたように剝離面が複雑で凸面状となる。打面は線状となっているが、既報第13図の石核とは異なる。黒曜石製。62は良質の黒曜石角礫を素材に、90度打面を転位して剥片を剥取した残核に近い状態の資料である。63、64ともに相似た形状をみせる黒曜石製で、63は3回の、64は2回の打面調整を行なって周縁より剥片の剥取を行なっているが、定形的な剥片剥取の痕跡は見られない。65は黒曜石の残核で、上下両端より剥取。正面下部を細調整して搔器として再利用している。被熱により小さなヒビが見受けられる。

### 石斧 (第18図66)

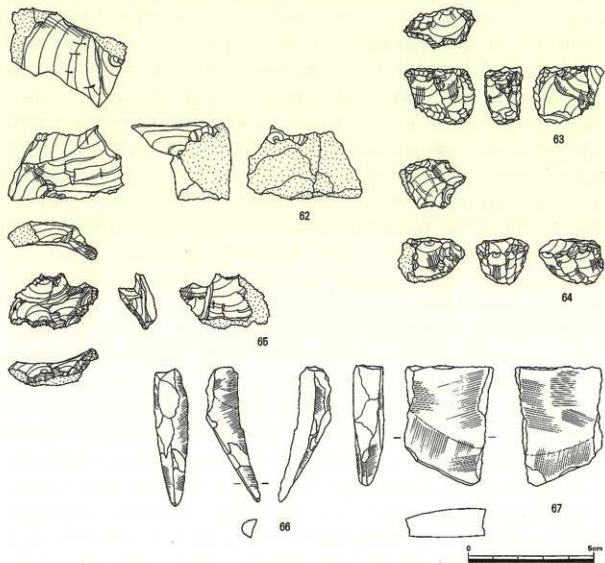
66は硬質砂岩製の磨製石斧片と考えられ、擦痕が認められ稜がたっている。

### 石包丁形石器 (第18図67)

67は硬質砂岩製の石包丁形石器で、大きく欠損している。刃部は鈍いものの片刃に近い両刃に研ぎ出している。

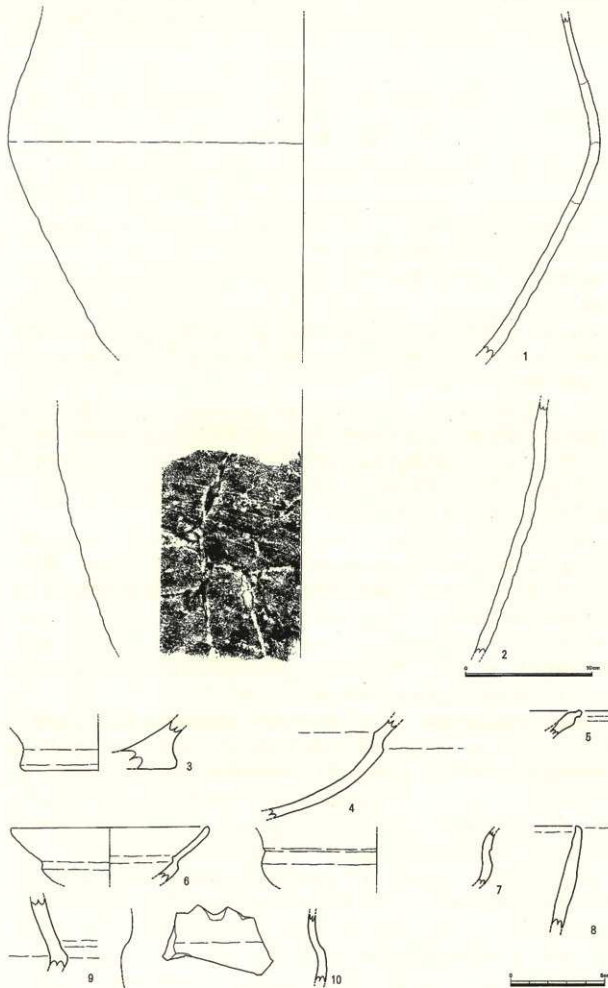
### 3-2-2 土器 (第19図)

1は1号埋壺に使用された深鉢である。粘性の強い土層に長年月包含されていたため、器壁が脆弱化し復元が困難であった。ために取り上げ時のデータに依拠して復元したため若干の誤差があるものとする。底部は埋納時に打ち欠かれて存在しなかったが、若干内湾気味に肩部まで立ち上がり、さらに内湾のち外反して頸部を形成し口縁部に続くものと思われるが、口縁部も欠失している。器壁は10mm前後で大きさの割には薄く、粘土紐は約5cm程度で、粘土紐上端は凹に、下端は凸に整形し接合している。しかし、肩部直下の粘土紐上・下端は凸で上面擬口縁状をなし、またこの粘土紐に接着する上位の粘土紐は上・下端ともに凹状に整形し接合するようにしている。調整は内外面ともに荒れていて不明であるが、(貝殻による条痕を)ナデ消している。色調は外面胴下半橙色、他は褐色、内面褐色～明黄褐色で、焼成は良好である。また、胎土も精良である。復元肩最大径47cm、残存高約26cmを測る。日常の土器を転用しており内面に炭化物の付着が認められた。2は2号埋壺で現存最大径約38cm程度で1号より一回り小さい。色調・胎土・焼成は1号埋壺に相似。外面にわずかに左上りの粗い条痕が看取される。3は1号埋壺直近で検出したもので1号に接合する可能性が大きい底部である。底径約83mmで断面台形を示し、円盤貼付と思われる。4は浅鉢の破片で内湾しながら立ち上がる体部に反転する頸部が接合する部分である。色調は外面黄茶～淡黒色、内面淡黒～黄茶色、胎土精良、焼成は良好である。内外面ともにヘラミガキで仕上げている。5は浅鉢口唇部で端部を外方上位に短く伸展させ、下部外面に凹線を施す。色調は黄茶色、胎土精良、焼成良好。調整は、内外面ともにナデか？6は内湾する体部から反転して内湾気味に外方上位に伸張する口縁部を有する浅鉢で、底部を欠失している。器表面は荒れていて薄く剝落しているが、ナデ調整と思われる。黄茶色を呈し、胎土に黒雲母、長石、石英を多含する。焼成は良好である。7は浅鉢片で体部から頸部に移る部位に段をなしている。調整は内外面ともにナデ仕上げ。色調は黄茶色、胎土精良、焼成良好である。8は深鉢口縁部で若干内湾する傾向にあり、端部は平坦に仕上げで角張っている。口縁直下内面に浅くわずかに凹線が残る。調整手法は器表が荒れており不明。色調は褐色を呈し、胎土に黒雲母、長石、石英を多含する。焼成は良好である。9は8と相似た色調、胎土、焼成を示す深鉢胴部片で、体部から頸部に移る部位の資料である。接合部直上に凹線を一条施す。10は陶器の花瓶で水引き成形、上軸は外面・内面頸下まで施釉しているが発色せず白濁している。



第18图 石器实测图





第19图 土器实测图

## IV まとめ

前章までにおいて、本遺跡の概説を行なったので本章において若干の総括を行なってまとめとしたい。

下峰原遺跡が最初に利用されたのは、旧石器時代に遡るが、遺物においてその痕跡が僅かに看取されたものの、良好な包含層の検出はなされなかった。

次に遺跡として利用されたのが、縄文時代晩期である。2基の埋甕と多数のピット群をもつ遺構である。

埋甕はすべてが埋葬に関連するものではない可能性もあるとの指摘がされているが、本遺跡の場合は、立地・埋納方法・覆土の状況や、2号埋甕からの副葬品と思われる石鏃の出土から埋葬関連の遺構として把握している。

県内での埋甕検出例は管見で知り得たのは第5表のとおりであるが、未だ検出例は多くない。19遺跡84基ほどが確認されている。時期的には縄文時代後期後半から晩期全般を通じて見られる。しかし、それらの情報が遺跡の全体的な構造を把握し分析した資料として提出されたものではないため、居住域と埋葬域の関係など詳細について論じることは困難である。だが多くの場合、居住域に近接した場所に埋葬域が営まれることが多いようである。

長崎県南高来郡回見町<sup>註1</sup>筏遺跡は、有明海に北面する標高10m前後の微高地上に立地し、昭和35年以降7次の調査が行なわれ、56基の縄文時代後期後半の西平式を中心とする埋甕が<sup>註2</sup>検出されている。降って平成4年度には長崎県教育委員会によって重要遺跡範囲確認調査が行なわれ、前回調査に後続する後期末から晩期初頭の埋甕2基が検出された。TP5からは1号カメ棺が、さらに100mほど南下したTP20からは2号カメ棺と2基の土壌墓が検出され、異なった埋葬遺構が近接して見られることは、被葬者の年齢差、あるいは性別差など、どのような属性を表象しているのか居住域との関連性を含めて課題が残るところである。

長崎県西彼杵郡西海町横瀬<sup>註3</sup>ケイマンゴ-遺跡は西彼杵半島北端の標高40m前後の丘陵鞍部に立地し、A・B-6・7区において縄文晩期前半と思われる多くのピット群と1基の埋設甕遺構が検出されている。ピット群は後世に削平された結果極浅となっているが、生活面の一部との理解がされている。また、埋設甕遺構はこれらピット群の西側に隣接・立地している。当初、石囲いの炉跡と判断されたが顕著な焼土や灰が見られないことや、下部から直立の甕が検出されたことにより、炉跡もしくは埋甕埋納に伴う「燻火」の可能性を併記している。

長崎県大村市荒瀬・今宮の両町に位置する葛城<sup>註4</sup>遺跡は郡川左岸標高50mほどの丘陵に立地し、水田との比高は約15m程度である。縄文時代晩期前半頃の5基の埋甕が約20m範囲の近接した状況で検出されており、また30mほど離れて約40個ほどの柱穴群が確認されている。これら柱穴群の時期などを確定させる遺物の確認はなされなかったものの、グリッドからは弥生土器片が僅かに確認され、他の時期の遺物が見られないことから、これが下限の時期を示していると考えたい。埋甕と柱穴群とを積極的に関連づけることには若干の躊躇を覚えるが、他の遺跡と

同様居住域と埋葬域の接近の在り方が見て取れるのではなかろうか。

熊本県菊池郡七城町大久保遺跡<sup>註5</sup>では、縄文後・晩期の7棟の住居跡と7基の埋甕が検出された。調査区のⅧ区では、住居跡の中央に炉跡をもつ晩期前半天城式に属する円形住居跡4棟と住居跡の西側に3基の埋甕が隣接して営まれていることが確認された。またⅧ区の北側に位置するⅥ区からは楕円形状の土壇(69×56×15cm)が1基確認されており、埋葬遺構の可能性が想定されている。本遺跡では、埋甕は住居跡に隣接し、土壇は生活域に外接するように配置されていることが窺える。

佐賀県佐賀市金立町金立開拓遺跡<sup>註6</sup>では、縄文後・晩期の土壇、竪穴住居跡、壺棺墓、溝などが検出され、住居跡と壺棺墓の関係は連続しているため無関係のようであるが、後続する時期の遺構によって消滅したことが考えられる。このうちSK057土壇について祭祀的性格をもった炉を伴う土壇で、SJ063壺棺墓の存在との関係から葬送儀礼に関する土壇の可能性を想定しており示唆的である。

以上縄文時代後期後半から晩期にかけての数遺跡について瞥見したが、埋甕を主眼としたとき共伴する遺構として住居跡や土壇墓、特殊な土壇などを挙げることができ、森田孝志氏の<sup>註7</sup>指摘を追認することができる。これは一つには居住域と埋葬域の未分化を示しているものと考えられ、埋甕は子供の遺骸を居住域に近接し、大人の遺骸は土壇墓に埋葬し居住域に外接させているとも受け取れる配置を示している。

このような傾向は、縄文時代晩期終末から弥生前期後半までの生活・埋葬域を残した長崎県佐世保市本山町の四反田遺跡<sup>註8</sup>にも引き継がれている。縄文晩期の住居跡は1棟確認され、この住居跡北西約20mで板付Ⅱ式と組み合わせた夜白式の壺棺が1基検出された。夜白式壺を下甕とし旧習通りに甕の底部は打ち欠いて直立させていた。相前後して前期後半期には21棟の住居跡が3期に亘って営まれ支石墓・石棺墓が居住域に、底部完存で斜めに埋納する壺棺墓が居住域西限に近接して営まれている。これに対し、成人墓壇群は生活域東限に立地しており、大人と子供の埋葬域の違いを見せているのか、より広範な調査が望まれる。また、殆どの住居跡が屋内炉を備えているが、屋外炉も29基遺跡中央部に占地し、中には16号屋外炉のように炉としての機能停止後、炉上に石と磨製鏃を乗せ石囲いとした例もあり「火に係る祭祀的な遺構に変化」した特殊な機能を窺わせている。

さて、本遺跡A地点のA・B-0・00区で検出されたピット群のうち、P1とした不定形土壇は、床面が一定せずかつ数孔を穿つなど生活関連の遺構とは認めがたく、特殊な機能を付与されたものと考えられる。同様な遺構は金立開拓遺跡<sup>註9</sup>のSK057土壇に認めることができるようである。金立の場合、この土壇を壺棺墓との有機的な関連性を認め葬送儀礼に伴う遺構としており、首肯されるところである。本遺跡P1の場合は、粘土焼成塊が床面に貼りつくようにして検出されたにもかかわらず、床・壁面は被熱による赤変・堅化は認められず、また覆土からは10個ほどの焼土塊が検出されたが、生活に関連すると思われる遺物の検出はなされなかった。金立例のように葬送祭祀に関連を持つ遺構と考えられる。

さて、この火を媒介とする葬送祭祀に関連する遺構と思われるものの実態はどのように考えられるのであろうか。

橋口達也氏は「縄文後・晩期の墓制は極端な屈葬というよりも火葬墓である可能性がきわめて強い」と曲り田遺跡・浄土院遺跡例をもって火を媒介とした火葬の可能性を示唆している。

焼骨の存在がすなわち火葬という葬法的一般化・普遍化とは考えられないが、土葬が主であったことは多くの遺跡の在り方から承知されるところであろう。

火葬は死者の遺体を火で焼く葬法で、一次葬として火葬し、残った骨灰などを骨壺に納め、土中や各種の墓所に葬るのがふつうであるが、土葬した遺骨を改めて火葬することもある。このように火葬は第二次葬あるいは再葬の一種と位置づけられる。

山田康弘氏は子供の埋葬に関し「単葬に限った場合、土器棺あるいは土壙に埋葬されるといふ埋葬形態の違いは、出産時の生死に関係したものであったと推察できる」とし、子供の埋葬が壙棺単一でなかったことを指摘している。

この現象は、例えば福岡県朝倉郡杷木町の楠田遺跡<sup>BE13</sup>に確認されるようだ。この遺跡は縄文晩期末葉から弥生早期の住居跡が7棟検出され、これらに付随する同時期の土壙墓が20基確認されている。居住域と埋葬域が近接して営まれており、埋葬域は土壙墓のみで構成され、壙棺などは検出されていない。また同町小覚原遺跡<sup>BE14</sup>でも同時期の住居跡や1基の土壙墓様土壙が確認されているが壙棺は見られない。両遺跡ともに埋葬域での墓制は土壙墓のみで構成され壙棺の検出がなされず、他の遺跡と際立った違いを見せている。すなわち、埋葬域に土壙墓のみが検出される現象は、子供の埋葬に関しては壙棺を主体としながらも土壙墓に埋葬されることもあったことを示唆していると考えられ、さらにこのことは大人も子供も土壙墓のみで埋葬する葬法の存在の可能性を示している。

さらに対論として、壙棺にも大人の遺骸を埋葬する葬法例があったことを類推させ、橋口氏の指摘するとおりであり、その際は再葬の方法として火葬が行なわれたと思われる。この火葬の時機能したのが、本遺跡や金立例に見られる火を使ったと見られる特殊な土壙ではなかったかと推察される。

このように見てくると、縄文時代後期後半頃から見られる埋葬域は、その占地の在り方として居住域に近接しながらも大人と子供の区分が見られ、主として子供は埋壙に、大人は土壙墓に埋葬される傾向を指摘できよう。反面、埋壙のみ、あるいは土壙墓のみ居住域に近接して存在する遺跡では、より詳細な遺跡の構造の分析を経て、その現象を理解すべき性格を有している。

また、居住域と埋葬域の未分化は、ある一定期間存続し、晩期後半突帯文の時期あたりから分化しはじめるものと推察され、久保泉丸山遺跡<sup>BE15</sup>、礫石A・B遺跡<sup>BE16</sup>のように継続していくものと思われる。

以上、若干冗長になったが、縄文時代後期後半から出現する埋壙、土壙墓などを主体とする埋葬域の存在は、その当時の社会的・経済的基盤の確立を背景として出現した縄文人の葬送に

関する現象であり、それは縄文農耕の定着によって初めて生み出されたものと評価できよう。

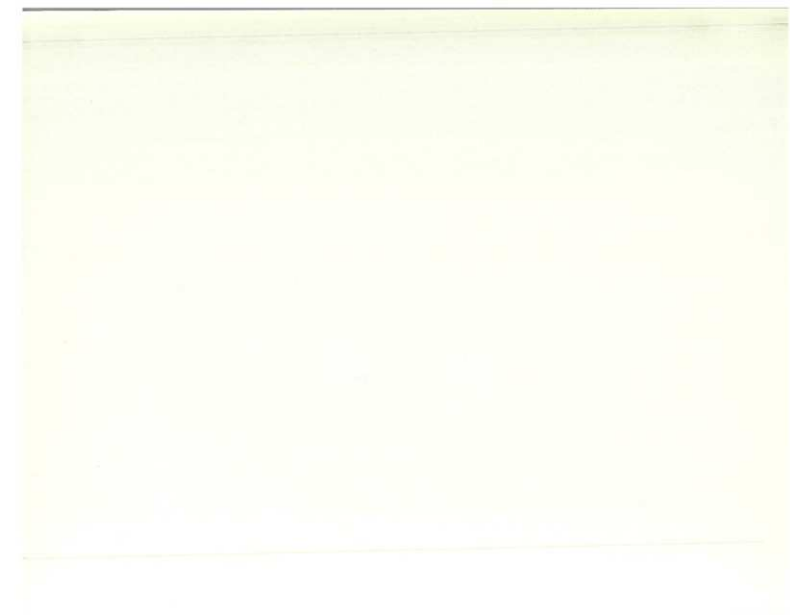
- 註1 古田 正隆『筏遺跡—縄文後・晩期の埋葬遺跡—』百人委員会 1974  
 註2 寺田 正剛編『筏遺跡』『長崎県文化財調査報告書』第114集 長崎県教育委員会 1994  
 註3 横山巳貴子編『ケイマンゴ—遺跡』『長崎県文化財調査報告書』第52集 長崎県教育委員会 1980  
 註4 藤田 和裕編『葛城遺跡』『長崎県文化財調査報告書』第98集 長崎県教育委員会 1990  
 註5 吉田 正一編『大久保遺跡』『熊本県文化財調査報告』第143集 熊本県教育委員会 1994  
 註6 蒲原 宏行編『金立開拓遺跡』『佐賀県文化財調査報告書』第77集 佐賀県教育委員会 1984  
 註7 森田 孝志『Ⅷ、1.(1)遺構』『金立開拓遺跡』『佐賀県文化財調査報告書』第77集 佐賀県教育委員会 1984  
 註8 久村 貞夫『四反田遺跡』佐世保市教育委員会 1994  
 註9 註6と同じ  
 註10 橋口 達也編『石崎曲り田遺跡』『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第8集 福岡県教育委員会 1983  
 註11 重松 和男『火葬』『世界考古学辞典』平凡社 1979  
 註12 山田 康弘『縄文時代の子供の埋葬』『日本考古学』第4号 日本考古学協会 1997  
 註13 中間 研志『楠田遺跡』『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』49 福岡県教育委員会 1998  
 註14 伊崎 俊秋『小笠原遺跡』『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』49 福岡県教育委員会 1998  
 註15 東中川忠美編『久保泉丸山遺跡』『佐賀県文化財調査報告書』第84集 佐賀県教育委員会 1986  
 註16 田平 徳栄編『礫石遺跡』『佐賀県文化財調査報告書』第91集 佐賀県教育委員会 1989

第5表 縄文時代埋蔵一覽

No	遺跡名	種別	所在地	形式	埋蔵方法	遺物の状況	時期	資料・上、下	埋蔵品数(個)		備考	文献
									土	器		
1	筏 A地点 2 T	1	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	単独	横立	欠失						百人委員会『筏遺跡』1974
2	筏 A地点 2 T	2	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	単独	横立	欠失						百人委員会『筏遺跡』1974
3	筏 A地点 2 T	3	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	単独	横立	欠失						百人委員会『筏遺跡』1974
4	筏 A地点 2 T	4	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	単独	横立	欠失						百人委員会『筏遺跡』1974
5	筏 A地点 2 T	5	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	単独	横立	欠失	Ⅲ 3期					百人委員会『筏遺跡』1974
6	筏 A地点 2 T	6	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	単独	横立	欠失				石籠台		百人委員会『筏遺跡』1974
7	筏 A地点 2 T	7	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	単独	横立	欠失	Ⅲ 2期					百人委員会『筏遺跡』1974
8	筏 A地点 C T	20	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	横割	直立	共に欠失	Ⅲ 2—3期	遺跡				百人委員会『筏遺跡』1974
9	筏 A地点 C T	21	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	横割	直立	共に欠失	Ⅲ 2—3期	遺跡				百人委員会『筏遺跡』1974
10	筏 A地点 C T	22	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	横割	直立	欠失	Ⅲ 3期	小形鉢				百人委員会『筏遺跡』1974
11	筏 A地点 C T	23	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	横割	直立	共に欠失	Ⅲ 3期	小形鉢				百人委員会『筏遺跡』1974
12	筏 A地点 A T	34	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	横割	直立	共に欠失	Ⅲ 5期					百人委員会『筏遺跡』1974
13	筏 A地点 A T	35	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	横割	直立	共に欠失	Ⅲ 5期					百人委員会『筏遺跡』1974
14	筏 A地点 A T	36	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	横割	直立	共に欠失	Ⅲ 1期					百人委員会『筏遺跡』1974
15	筏 A地点 B T	37	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	横割	直立	共に欠失	Ⅲ 3期					百人委員会『筏遺跡』1974
16	筏 A地点 A T	38	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	横割	直立	欠失	Ⅲ 5期					百人委員会『筏遺跡』1974
17	筏 A地点 A T	39	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	横割	直立	欠失	Ⅲ 5期					百人委員会『筏遺跡』1974
18	筏 A地点 B T	39	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	横割	直立	欠失	Ⅲ 5期					百人委員会『筏遺跡』1974
19	筏 A地点 B T	31	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	横割	直立	欠失	Ⅲ 5期					百人委員会『筏遺跡』1974
20	筏 A地点 B T	32	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	横割	直立	欠失	Ⅲ 5期					百人委員会『筏遺跡』1974
21	筏 B地点 J T	32	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	横割	直立	欠失	Ⅲ 5期					百人委員会『筏遺跡』1974
22	筏 B地点 K T	34	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	横割	直立	上欠失	Ⅲ 5期					百人委員会『筏遺跡』1974
23	筏 B地点 K T	35	長崎県佐賀郡神代町東乙1618	横割	直立	共に欠失	Ⅲ 5期					百人委員会『筏遺跡』1974



## 圖 版







遺跡遠景



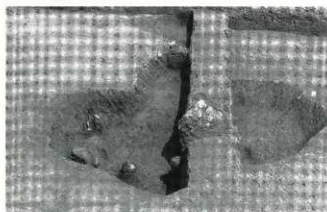
1-1区 東壁土層



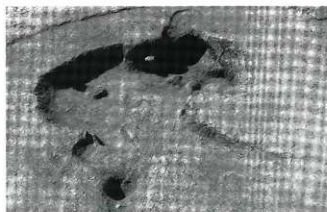
A・B-0・00 ピット群 (西より)



同左 (北より)



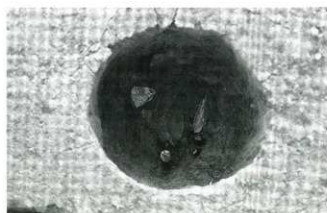
pit 1 土塊及び焼土塊出土状況



同左 完掘状況



pit 29 遺物出土状況



同左